

高知県教育委員会 会議録

平成26年度第8回教育委員協議会

場所：教育委員室

(1) 開会及び閉会に関する事項

開会 平成26年7月16日(水) 13:30

閉会 平成26年7月16日(水) 14:50

(2) 出席委員及び欠席委員の氏名

出席委員	教育委員長	小島 一久
	委員	竹島 晶代
	委員	八田 章光
	委員	中橋 紅美
	委員(教育長)	田村 壮児
欠席委員	委員	久松 朋水

(3) 高知県教育委員会会議規則第9条の規定によって出席した者の氏名

高知県教育委員会事務局	教育次長(総括)	勝賀瀬 淳
〃	教育次長	中山 雅需
〃	教育次長	永野 隆史
〃	参事兼教職員・福利課長	彼末 一明
〃	教育政策課長	有澤 功
〃	高等学校課課長	藤中 雄輔
〃	高等学校課企画監	坂本 寿一
〃	教育政策課課長補佐	中平 貢正
〃	高等学校課課長補佐	高野 和幸
〃	高等学校課課長補佐	竹崎 実
〃	教育政策課チーフ	溝渕 松男(会議録作成)
〃	教育政策課主任指導主事	葛原 彩子(会議録作成)

(4) 教育委員長の依頼により出席した者

高知県市町村教育委員会連合会代表

高知県高等学校長協会代表

【冒頭】

委員長 教育委員協議会を開催する。

教育長 (あいさつ)

本日は県立高等学校再編振興計画の「たたき台」について、ご意見を賜りますための、今年度第8回目の教育委員協議会となりますが、高知縣市町村教育委員会連合会会長と高知県高等学校長協会会長にご出席をいただいております。ご多用の中、ご出席いただき、誠にありがとうございます。

さて、県立高等学校の振興に向けた、学校の再編や統合という課題への対応につきましては、1月末に、再編振興計画の「たたき台」をお示しし、関係者の皆様から、様々なご意見をいただいていたところですが、県教育委員会としては、改めて関係する学校の関係者や教育関係者の皆様からご意見をお聞きし、丁寧に議論を重ねていく必要があると考え、これまでに、統合に関係する学校の関係団体の皆様や県の教育関係団体の代表の方からご意見をうかがってまいりました。本日は、その一環としてご出席をお願いした次第であります。

この後、再編振興計画の「たたき台」等について、事務局より詳しい説明をさせていただいた後、ご意見をそれぞれお聞かせいただきたいと思いますと考えておりますので、よろしく申し上げます。

【協議 県立高等学校再編振興計画について（高等学校課）】

○高等学校課企画監 説明

○高知縣市町村教育委員会連合会との意見交換

地教連代表	資料1の平成24年度までの取組状況にあるように、平成16年度から平成25年度までの10年間を見通した県立高等学校再編計画が平成15年11月に策定され、大柘高校が山田高校に、仁淀高校が佐川高校に統合された。これを自分は第一期と考えている。当時、私は中学校で校長をしていた。その時、県教育委員会に切にお願いしたことは、統合で地元で学校がなくなると地域の活力が落ちるので、地域の学校を存続してほしいこと、さらに大柘地域に住んでいる中学校卒業生が山田高校に進むために、自転車の購入やバス代が必要になるので、経済的な理由で高等学校教育を受けられない状況にならないようにすることである。全体を見た時にはいろいろな状況があるだろうが、地域の学校に対して、いわゆる規制緩和をぜひ今後考えて欲しいと要望したことを覚えている。中山間地域の学校の活性化ができない状況がないように、最低限の条件の緩和をお願いした。そのような中で、「県立高等学校再編振興」と、初めて「振興」という言葉が入り、検討委員会が設置され、協議を重ね、その考えをまとめたのが「県立高等学校再編振興に関する報告」である。その報告を受け、新しく南海トラフ地震への対策も加えた事務局の考えをまとめ、教育委員協議会に提出したと考える。そして、教育委員協議会における事務局案の協議で、8
-------	--

回実施され、基本的な考え方の案と前期実施計画（案）の策定に向けたたたき台になったと思う。資料を見せていただくと、教育委員や事務局の方々が真摯にいろいろなことを協議し検討していると感じている。私が、第一期の時に言った意見が配慮され、反映されている。その真摯な取組に敬意と感謝を示したい。

再編振興計画案は、今後 10 年間の県立高等学校の在り方と方向性を示した「基本的な考え方」とそれに基づいた具体的な「実施計画」で構成されている。説明にもあったが、基本的な考え方には 5 つの視点があり、その実際の取組についても提言されている。それについて意見を述べたい。

1 点目は生徒数の減少に応じた適正な学校規模の維持と適切な配置についてである。お願いしたいのが、一律に県下全体の学校の学級数を減らすのではなく、県教委がたたき台として示したように、高知市及びその周辺地域の中央部と過疎化が著しく近隣に他の高校がない地域では、学校規模の在り方を分けて考え、学校規模の基準の緩和を行った適正な配置により、中山間地域においても地域での学びの機会を県教育委員会としてぜひ保障して欲しいということである。県下の 34 市町村それぞれが活性化し、活力をもつことが県全体の活力になると考える。生徒数の減少により非常に難しいことではあるが、中山間地域の学校の存続ができるように、県教育委員会の「たたき台」をぜひ実行してもらいたい。これが今日の一番のお願いである。

2 点目である。生徒数の減少により統廃合は避けては通れない。生徒数が 10 年間で県下で約 1,000 人、高知市でも約 300 名減少すると言われている。高知市内校でも一律に学級を減らすことは、その学校の活力の低下になるので、将来の子どもたちにより良い教育環境を守っていくためには統合を行うことが必要であるということ、我々としても理解していくべきだと考えている。なぜ、高知南中高校なのかという話になるが、1 月 28 日の高知新聞を見た時には私も驚いたが、説明を聞き、経過を聞き、新聞報道等を見ていくなかで、「たたき台」の通りだと理解した。一つは教育環境の充実、これは高知南中高校で取り組んできた国際教育と高知西高校で取り組んできた英語教育とを融合することにより、県教育委員会が新しく考えているグローバル人材育成について相乗効果を得られるのではないかと、高知南中高校の良さを高知西高校で活かせるのではないかと、統合の効果が出るのではないかと考える。グローバル人材育成は、南国市でも小学校 6 年間と中学校 3 年間の 9 年間を見通して行っている。そして今年から幼児教育にも入れている。グローバル人材育成については、6 年間を見通した積み重ねで行わなければならない。高知南中高校と同じように統合した高校に中学校を併設して中高の 6 年間一貫教育の中で育てていくことが絶対必要であると思う。

また、震災対応についてである。高知南中高校は海に近く、最大浸水深 3 M が予想されており、南海トラフ地震の津波への対応を考えた場合、子どもの命を守ることと津波に襲われた後の学校再開については、高知市内は浸水期間が特

に長いことが予想されていることもあり、非常に困難な状況である。何よりも子どもの命、いつ来るか分からない地震、津波から1,000人に及ぶ子どもの命を守るという意味においても、津波の心配のない場所に移転することが適切でないかと考えている。

3点目、須崎高校と須崎工業高校の統合は、県教育委員会が示した「たたき台」による適正な学校規模の維持と適正な配置、そして適正規模として1学年4学級以上がこの取り組みによって維持でき、学校の活性化を図ることができる。また、高吾地区の中心校となることが可能であり、生徒数の減少への対応を逆手にとり統合することによって活性化するのではないかと考える。須崎高校は海沿いで最大浸水深が7Mと聞いている。津波による大きな被害が考えられる。南海トラフ地震へ備え、地域の教育力や子どもたちの命を守るという意味においても、高台にある須崎工業高校へ平成31年を目途に統合する原案に賛成したい。いろいろな問題点があると思うが、長い先のことを考えれば、今これに手を付け実施していくべきではないか。ぜひ進めてもらいたいと考える。須崎高校は、現在、総合学科4学級、定時制1学級だが、統合のイメージでは普通科3学級と定時制1学級と、定時制を残してもらいたいと思っている。働きながら学ぶことのできる定時制の環境を維持してもらいたい。工業科の方は4科から3科へという案だが、現在の機械科、造船科、電気情報科、ユニバーサルデザイン科を3科に統合する際には、県下の工業学校の学科の状況、地元の要求等も十分踏まえて適切な設置をお願いしたい。それによって地域の方々も地元の学校という意識が芽生えるのではないかと考える。

高知南中高校と高知西高校とが統合して新たな学校ができるわけだが、最初が大事である。現在の岡豊高校は、最初が良かったので落ち着いており、これまでの実績をあげることができた。スタート時点でのきちっとした取組が大切だと思う。

高知南中高校を希望し、卒業した生徒のことを思うと非常に胸が痛む。1つの方法として、時間はかかるかもしれないが高知南中高校を希望した生徒は高知南中高等学校でできるだけ生活してもらおう方が良いと思う。しかし、統合であるので、統合の形をきちんと示してほしいと言われていると思うが、短期間で統合すると非常に難しい問題が出てくると思う。高知南中高校と高知西高校は、それぞれの学校でいろいろな伝統、校風があるので十分審議したうえで統合していくことが大事である。統合した中高校は新しいグローバル教育に取り組むわけであるので6年間の期間がかかる。1年ごとに入ってくる子供たちにきちっとグローバル教育の方向性を示し、位置付けをし、6年間かけて積み上げたものが定着することにより、子どもたちにも納得してもらえるものになる。私は、高知南中高校を選択した生徒は、3学年揃わないかもしれないが、高知南中高校で卒業したい気持ちがあるのではないかと考える。これについては、高知南中高校の生徒たちの気持ちを聞き適切な対応をお願いしたい。

教育長

今回の再編振興計画の1つの柱は、中山間地域の学校については学校規模が小

	<p>さくても他に通学できる学校がないという観点から、1学級でも学校を残すということである。このことは、以前要望いただいたことをほぼ生かした内容である。また、統合の仕方についてはおおむね評価をいただいたのではないかと考えている。統合を進めるからには関係者の皆様に理解をいただく必要がある。結果としてよかったということを示していける様これから努力していく。高知南中高校に入った生徒は高知南中高校を卒業する方がいいという件について、「たたき台」はそのような案であるが、前回の高知南中高校関係者との意見交換で、最後に高知南中学校に入学した生徒については5年間下級生がいない状態が続くので、教育環境を考え、別の案が考えられないのかという意見があり、別の統合案を検討しているところである。次回の高知南中高校関係者、高知西高校関係者との話し合いの中で少し見直しをして話をしたいと考えている。</p>
委員	<p>中山間地域の学校の維持は今回の柱である。ただ維持するだけでなく充実に向け、ICTなどを使い高知市内校と比べ不利益にならないような教育ができるようにしていきたい。</p>
地教連代表	<p>ぜひよろしくお願ひしたい。高知南中高校で下級生がいない状態が続くことに対しては、すごく胸の痛むことであるので、うまく統合する方法を考えていただきたい。</p>
委員長	<p>子どもたちの扱いというのは非常に難しい問題なので慎重にいろいろ考えていかななくてははいけない。</p>

○高知県高等学校長協会との意見交換

校長協会 代表	<p>高知県高等学校長協会を代表して意見を述べさせていただく。</p> <p>今後の生徒減少を踏まえての再編、振興の説明があった。以前の生徒数が増加している時には、順番に新しい学校をつくっていただいた。今度は、逆に生徒数が減少していくので、統廃合は自然な流れではないかと思う。一方、各学校は特色ある学校づくりに努めてきた。前教育長より県立校長会議の中であったと思うが、各高校が生き残りをかけてオンリーワンの学校、これだけは他校より優れていると、これは負けないというような特色づくりをしてもらいたいというような話があった。それを受け、各校がそれぞれに取り組み、すべてではないが成果を上げていった。どの学校もできれば統廃合の対象にはなりたくない、もしなれば残念に思うし、辛いということもあるかと思う。しかし、説明があったように、生徒数の減少が激しいこと、また、教育効果を考えるとある一定の学校規模が必要ということから学校の統廃合はやむを得ない。</p> <p>一定規模の学校が必要という話をしたが、その理由を現在の勤務校を例に挙げて説明させてもらう。学校全体の生徒数が減少すれば、学校全体の勢い、エネルギーが小さくなっていく。現在の勤務校は1学年7学級規模の学校である。私は平成22年度に赴任したが、その時3年生は8学級あったが、1年後には3学年全て7学級になった。生徒数が40人減っただけで学校行事等を見てい</p>
------------	---

た時に今話したことを感じた。これから、毎年のように学級減があると、学校全体の勢いがどんどん小さくなっていくのではないかと心配する。具体的な話をする、現在の勤務校の生徒の進路希望は、ほとんどが大学進学となっており、その希望を実現させるために学校として取り組まなければならない。大学といっても国公立大学もあれば私立大学もあり、理系、文系もある。同じ理系の中でも理学部、工学部、医学部などがあり、入試科目がそれぞれ違う。生徒たちが希望する大学、学部、学科に対応した入試科目の勉強ができる、それぞれに対応した教育課程を編成するためには、ある程度の学校規模がないと難しい。勤務校の場合、以前普通科が1学年7、8学級あった時には2年生から選択できる類型を3つ設けていたが、6学級の現在は2つである。その1つの類型の中に、更にいろいろな教科の選択科目を置いている。自分の進路に見合った類型を選び、選択科目を選ぶという形で勉強していくわけである。同じ文系でも、文系の中に複数学級があるのと、1学級しかないのでは教育効果が変わってくる。いろいろな選択科目を置けるといったが、例えば、地歴でいうと、世界史、日本史、地理という選択科目を置いた時に、選択人数の少ない科目があれば、講座が成立しない。これが複数クラスであれば、講座を合併することでそれぞれの科目が成立させることも可能となる。大学受験においては、学級内もそうだが、学級同士の競争などにより切磋琢磨できる環境となり、力も伸びていくと思う。今の学校規模であればなんとかそれができており、一定の成果も出ているように思う。要するに学校規模が小さくなると、教科選択の幅も狭くなり、大学の受験の幅が少なくなって、一定の大学、学部、学科に絞られてきてしまう。そうすると今までのような成果はなかなか上げられないし、全国での競争の中で、合格はなかなか難しいのではないかと心配をしている。これが教育課程の編成の面から見た一定の学校規模の必要性であり、現在と同程度の学校規模は欲しいと考えている。

もう一つは、部活動である。現在の勤務校の場合、生徒の約9割が何らかの部活動に加入しており、50数パーセントが体育系の部で活動している。部活動は高校生活の中で勉強に次ぐ大事な活動だと考えている。部活動の中で責任感や連帯感が培われると同時に、好ましい人間関係も形成される。肉体的、精神的にも成長していく。勤務校では、部活動を通じて、例えば、学習への意欲が向上するようになったとか、集中して学習するようになっていったというようなこともある。このようなことから、部活は非常に大切なものだと思っている。しかし、私が赴任してから今までで、体育系の部が3つ休部になった。これは、今まで1学年8学級、9学級あった時は多くの生徒がおり、多くの部活動が活動してきたが、7学級になり、生徒数が減ったので、生徒の希望により各部活動に生徒が分散し、部員が少なくなって休部になった部もある。現在、活動している部も団体戦に出られるかどうか、ぎりぎりの部がいくつかある。極端な例で言うと、新入生が入って1年から3年まで全員がいた時は県体に出られたが、県体が終わって3年生が引退したら、次の公式戦には出られない部

もある。しかし、生徒たちは公式戦に出られないからその部を辞めて他の部に入るというようなことは考えない。今入っている部活動を最後まで続けたいと思っている。学校規模が小さくなれば部活動も当然絞られてくる。生徒たちがやりたいと思う、やってみたいと思うような部が幅広くあった方がベターだと思う。これも、学校規模が必要な理由である。このような現状で、生徒数減少の話を知ると、現在の1学年7学級から増やすというのは無理だと思うので、せめて現在の1学年7学級を維持して欲しいと思っている。勤務校の例で言っていたが、同規模の学校がいくつかあるが、どの学校もおそらく同じような状況、考えだと思う。そして、一定規模の学校を、これからの生徒数減少の中で維持していくためには、どうしても同規模程度の学校を統合していくことはやむを得ないのではないかと考える。

高知地区での統合の学校が今示されているが、これは南海トラフ地震による津波への対応のため統合の対象になったと理解している。津波への対応が無ければ選択肢は他にもあったのではないかと考えている。津波対応についてであるが、現在の案では高知地区と須崎地区の学校で示されているが、他に心配されているのが安芸地区、宿毛地区であるので、早い段階で対応の検討をしていただきたいと思っている。

次に中山間地域の学校についてだが、先日、都道府県の高等学校長協会長の会が東京であり出席していた。その時に高校再編の情報交換の機会があり、各県の状況を聞いてみると、基本的に基準があり基準を下回ると統廃合の対象になるということで大体進めているようである。しかし、その中で長崎県は離島があり、離島の学校は基準を下回っても考慮しているという話をしていた。高知県においての中山間地域は、近隣の地域に通学しようにもなかなか難しいことを考えれば、この長崎県の離島と同じようなものではないだろうかと考える。地理的な条件もあり、また高知県の場合は地域の振興ということもあり、1学年1学級でも存続させようと検討されていると報告してきた。中山間地域の学校については、その地域の振興もあり、地域の学習の機会の保障という観点からも今説明があった方向でよろしくお願ひしたい。

次に、産業系の専門学校についてであるが、産業を担う人材の育成、そして、産業振興ということは当然あるが、もう一つ生徒たちのニーズ、普通科と職業学科との割合も考えていただき、学科改編等の検討をされて適正な配置をお願ひしたい。

定時制・通信制については、学び直しの機会の提供や勤労者への学びの提供、あるいは地理的な生徒へ配慮など、説明にあったとおりによろしくお願ひしたい。

最後になるが、この再編や振興、特に再編の方の対象になった学校の校長は、教職員、生徒、保護者、校友会、学校によっては後援会、地域へ、大変な状況で対応していかなくてはならない。県教育委員会事務局の方には、校長をフォローしながら支援をしていただきたいので、よろしくお願ひしたい。

教育長	<p>一定の学校規模が必要であるというに対して、とても具体的な話をさせていただき、学校規模の大切さを再認識したところである。安芸、宿毛、清水の津波対策であるが、今の前期計画にはないが、今後の後期計画では検討をしていく。産業系の高校について、普通科と職業学科の割合を考えて欲しいとの話であったが、そういった意見も踏まえて検討させていただく。統合案の対象校の校長に対するフォローの件については、大変心労をかけているというのは理解している。手を携えてやっていきたい。どうぞよろしくお願したい。</p>
委員長	<p>言われた意見は非常によく分かる。ただ、一般の方に、なかなか説明しづらい。学校現場で教育に携わっていると学力面だけでなく、部活動の存在が非常に大きいというのが実感としてある。データを取ったわけではないが、学力が上がることと部活動の活性化とは相関関係があると思う。学校規模が小さくなって部活ができなくなると、自然と学力あるいは進路保障にも影響がでてくるような感じがする。それから、校長としては一定レベルからできるだけ高いレベルまでの進学保障をしたい。しかし、高いレベルの大学へ進学するには、細かい教育課程を組まないといけないという実態がある。例えば、東大や京大へは普通の大学への教育課程では対応できない。その時に人数が多ければ細かい教育課程も設定できるし、全般的に生徒への配慮もできる。非常に優秀な子どもを集め少数で行うやり方もあるが、多くの子どもたちを集めた生徒同士の切磋琢磨は非常に大きな効果がある。</p>
委員	<p>現場の先生の意見として非常に重たいものがある。学校規模が小さくなることにより、部活動や教育課程の編成ということで、非常に不利益がでるということであった。さらに将来の高知県のことを考えると、学校の先生方の指導力をあげていくことが必要であるが、一つの学校である科目において先生が一人しかいない状況になると、先輩からいろいろな事を学んでいくという機会がどんどん減ってしまい、数は確保できても、将来において良い先生が確保できるかという心配がでてくる。そういう観点で何か今まで経験されたことはないか。現場の同じ科目の先生が減ってしまっ、次の世代を育てるのが難しくなっていくような環境について実際どうか。</p>
校長協会 代表	<p>教員が減るだけでなく、異動で変わる場合もあり、ある先生が変わったらその学校の指導力が落ちてしまうということはよく言われるが、そうならないように、組織として、各教科としての取組、生徒に対して進路実績を上げるためにどう取り組んでいくか、教科指導をどうしていくかという取組をしている。いろいろな研修も教育委員会主催の研修もあるが、各校独自の研修を行ったりしている。それから今の勤務校の教員は自主的に、東京、大阪等の予備校等に指導力の勉強等に行っている。そういうことを積み重ねて、人数が減っても、異動で変わっても、何が来てもできるように、指導ができるように考えてやっているところである。</p>
委員	<p>実際その教科の先生方が減っていくことへの影響はそれほど気にしなくてもいいのか。</p>

校長協会 代表	教科の人数が減るということは、学級数が減ることになってくると思うので、先ほども言ったが、学級数が減ると教育課程の編成が狭まってくるので、そういう点から幅広い生徒の希望に応えることが難しくなってくる。生徒たちの希望に幅広く応えていくためには、ある一定の学級規模が必要である。ある一定の学級規模があれば、それなりの教員数は確保されるので、今、取り組んでいることは続けていけると思う。
委員長	教科の運営で組織的に運用できる。これは非常に大きいことである。異動で人が変わってガタッと落ちる状況では困る。それが避けられ安定的に指導力が保持されていくことが大切である。
委員 委員長	各教科が複数の教員で組織を作っていることが前提であるということか。 学校において、教員が教科で一人しかいないとすごく不安定である。だから小規模校では、教員による影響が大きい。本来、先生はどの先生も力をもっていなければいけないわけだが、経験などの差が出てくるのは普通である。その時に多く人数がいるとお互いに教員同士で指導方法の工夫をするので力の差がかなり小さくなる。デメリットを消していける。これは、組織が大きいか小さいかで全然違ってくる。
委員	例えばだが、小規模校になってある科目の先生が一人しかいないと、その先生が異動になった場合はどのように対処するのか。
委員長	あまり良いことではないが、異動の際には影響が少なくなるように力量のある教員の配置を考えていかなければならない。
委員	進学校の校長として、すごく具体的に話を聞いて良かった。進学だけでなく部活動も推進されている。現場の声ということですからすごく納得できるものであった。
委員長	貴重な意見をありがとうございました。我々も校長のバックアップをこれから考えていかなければならない。ありがとうございました。